

陸軍少飛平和祈念の会、会報 No19 号

2020(令和2)年5月

◎本会のHPは、<http://sho-hi.sakura.ne.jp/>

です。どうぞご覧ください。写真等を更新しました。

◎毎月第3土曜日に開いている定例会ですが、会場の武蔵村山市市民活動センターからの自粛要請に応じて、6月一杯まで開催を自粛します。

◎経費節減のため、会報をメール配信に切り替えています。パソコンのメールアドレスを、heiwakinen@sho-hi.jp までお知らせください。

(1) 新規会員

(賛同会員) 16期、後藤昭一さん、埼玉県入間市高倉2-3-50
よろしくお願いします。

(2) 寄付

15期乙の北村彦四郎さん、16期の田中通義さんから会の運営費に多額のご寄付をいただきました。ありがとうございました。大切に利用させていただきます。

(3) ビデオ収録

3月3日(火) 18期坂本幹雄さんのビデオ収録を、新宿区産業会館において、午後1時から4時過ぎまでの約3時間実施しました。また、3月15日、16期の北村彦四郎さんのビデオ収録を午後1時から約3時間墨田区のご自宅で実施しました。4月14日、同じ16期の田中通義さんのビデオ収録を千葉県のご自宅で約3時間半実施しました。現在ビデオ収録は、国の緊急事態宣言に従って自粛しています。緊急事態宣言解除の様子を見ながら再開する予定です。

(4) 防衛省防衛研究所戦史研究センターへの訪問

2月28日、嶋津と鳥海で防衛研究所戦史研究センターを訪問しました。石津センター長、立川研究室長、菅野資料室長と面談し、本会の趣旨、目的を説明し協力を求めました。情報提供として埼玉大学の研究者や関連する民間団体などについて助言していただくとともに、研究センターの資料室の利用などについて協力をいただけることになりました。

(5) 2019(令和元)年度の決算について

昨年度の決算についてご報告します。

収入、支出とも、予算額が781,091円に対して、決算額が853,

711円となり、72,620円の増額決算となりました。

収入では、予算が真如苑助成金50万円の他、寄付金と証言集の売上、交通費等の会員の自己負担等で25万円、会費の収入を3万円見込んでいました。寄付金と証言集の売上収入が増額になり、5万円以上の収入増加になりました。また会費収入も予算3万円に対し5万4千円と、予算を2万円余上回りました。会員増と会費納入の増加がその要因です。結果、総収入額は、予算額を7万円余上回りました。

支出は、旅費交通費が予算32万円に対し決算が10万円弱で20万円の減となりました。理由は、地方へのビデオ収録がなく旅費交通費に残額がでたことです。反面、印刷製本費が予算30万円に対し決算が50万円弱に増加しています。理由は、「証言集」の印刷製本と収録したビデオの文字起こしの費用の増加です。翌年度繰越金を約3万5千余円（昨年は1千円）残すことが出来ました。

2019（令和2）年度の決算は、収入面では寄付金と会費納入の増加、証言集の売上収入など、会員の皆様のご協力によるところが多く、感謝申し上げます。これにより、証言集の刊行とビデオ収録の文字起こしを実施することが出来ました。ありがとうございました。

（6）2020（令和2）年度の運営について

令和2年度は、元少年飛行兵のビデオ収録の続行と収録したビデオの文字起こし作業を進め、証言集の続編を刊行していきます。現在、文字起こしの作業を委託して行っています。真如苑以外の新たな助成金を得ることに努め、今年度中にも証言集の続編の刊行に努力していく予定です。

お伝えしてきたように、今年度の運営費は、真如苑の助成金が申請できないため、原則的には会費収入と寄付金で運営をまかなっていきます。昨年度の繰越金と年度末に一般会員の他、17期会、ビデオ収録を行った15期、16期の皆様方からもご寄付を頂いております。これにより年度当初のビデオ収録等の活動費をまかなうことが出来ます。さらに証言集続編の刊行のための新たな助成金の確保に努めていきます。

（7）2020（令和2）年度の会費納入のお願い

会員の皆様には、今年度の会費（年額1千円）の納入をお願いいたします。このNo19号の会報を郵送する皆様には、振替用紙を同封いたします。賛同会員の皆様の会費はありません。よろしくお願い致します。

（8）ビデオ収録の文字起こし

収録したビデオを証言集としてまとめるため、ビデオの文字起こしを進めています。作業の支援を申し出てくれた特定非営利活動法人フォーラム自治研究に委託し、現在、総計8人がかりで作業を行っています。今年の

8月を目途に進めていますが、大変時間と根気が求められる作業で、聞き取りにくい発言や独特な語句も多く苦勞しています。

(9) ビデオ収録の報告

令和2年3月3日(火)午後1時から4時過ぎまで、新宿区産業会館の会議室で第18期坂本幹雄さんのビデオ収録を実施しました。収録者は青木、川口、鳥海でした。第18期は、昭和19年4月陸軍少年飛行兵学校入校で、少年飛行兵としては最後に近い入校です。実際に軍隊活動の経験をした最後の少年飛行兵であろうと思われます。戦闘行為こそありませんでしたが、一家の長男であった坂本さんは家族ごと戦争の影響を受けていました。以下、収録内容の一部をご紹介します。



(東京、新宿で生まれる)

昭和4年8月19日、東京の淀橋区角筈1-750番地(現新宿区歌舞伎町)で、姉2人弟3人妹1人の7人兄弟の長男として生まれる。父親は建具職人だった。昭和11年4月淀橋第五尋常小学校に入学。昭和17年3月卒業。昭和16年4月に施行された国民学校令による第一回の国民学校の卒業生だった。

昭和17年4月旧制中学だった私立昭和鉄道学校に入学。同校2年生を終了する直前の昭和19年2月、立教大学の講堂で東京陸軍少年飛行兵学校を受験した。受験について家族会議で反対された。姉たちはまだ女学校で、長男だった私は父親の跡を継ぐものと思われていた。唐突に受験の話をしたら反対された。どうしても行きたいという強い希望を話した。結果的に両親も許してくれた。受験の時には「仕方がない。それではお国のために尽くしてこい」という雰囲気だった。受験結果が待ち遠しくて毎日ポストを何回も確認した。合格通知を受けて踊るような気持だった。

飛行機乗りは弱視ではだめだということで毎夜星空を眺めた。広い場所に

行って、明治神宮もマラソンして行って、よく星を眺めた。学校で相談した記憶はない。配属将校の勧めでもなく、あくまで自分の希望だった。飛行機へのあこがれがあった。陸軍幼年学校に行きたいと思った時期もあったが、軍人家族でないとハードルが高く、あきらめて少年飛行兵を受験した。戸山にあった幼年学校はすぐ近くだったのでそういう情報は自分なりにとっていた。

(満15才7月で入校)

昭和19年4月8日東京陸軍少年飛行兵学校に入校。「トントントンカラリンの隣組」と歌われた隣組や婦人会の人達が白衣の割烹着姿で新宿駅まで送ってくれた。駅までは歩いて10分ぐらいだった。駅前で万歳万歳三唱の大変な送迎をしてくれた。婦人会が作ってくれた千人針を肩に掛けて敬礼した。合格のうれしさだったか感激してぼろぼろ涙が出た。立川に行って適性検査で不合格になどなれないと改めて覚悟した。

学校の営門の右側が集会所で左側の奥に第一講堂という広い講堂があってそこで訓辞を受けた。第10中隊第8班に配属された。学校では朝から晩までそれまでなかった厳しさを率直に感じた。朝6時に起床して午前中に軍事学など中学校相当のカリキュラムを受けた。軍事学はとにかく精神学だった。軍人はこうあるべきだと軍人勅諭を始めすっかりたたき込まれた。区隊長や小隊長・中隊長クラスの人からも教えられた。午前中が学科、午後実科だった。運動神経が発達している方ではなかったが武道は楽しかった。柔剣道で剣道を選択して初めて竹刀を握った。あまり負けなかったと思う。肋木の上り下り、飛行兵特有のフラフープの回転具、騎馬台飛び込みなどの軍事訓練は辛かった。うまくいった記憶がない。

生活では不自由はなかった。食事の高粱飯は最初ぼそぼそして食べられなかった。習うより慣れろでだんだん食事が楽しみになった。食事当番を順番でやって、調理は近所のおばさんがやってくれたが、配膳などは食事当番がやった。ちょっと盛りの多いのを自分の分にする楽しみがあった。どうしても食べられなかった高粱飯も最後は美味しく食べられた。お腹がすいてどうにもならなかったという記憶はない。天皇陛下から賜った食事だから食缶の中に一つも残してはいけなかった。

志願して入校した自負があったので辛いとかいう気持ちはなかった。非常呼集などの訓練も、辛かった、苦痛だった、耐えられなかったというマイナス思考の感じはなかった。上官、班長から航空総監賞に推薦したという話を聞いて小躍りした嬉しさがあったが結果的にはだめだった。優秀だったとは思わないが真面目だったと思う。

(昭和20年3月陸軍生徒から陸軍上等兵へ)

19年10月に操縦、整備、通信の分科選考があった。8割が操縦希望だった。小学校時代から眼鏡をかけていて目が悪く、操縦を希望したが整備に配属された。運動神経が鈍く一般体育が出来なかったから操縦には適していなかったかも知れない。整備に分科されたが東航(東京陸軍少年飛行兵学校)の学科や実科の内容で操縦とか通信と違いはなかった。教養等は中隊単位でやっていたので。

軍装はカッコよかった。ただ17期までは帯革が本革だったが、18期からゴム製の堅いやつに変わってしまった。17期生が指導生ということで各隊に配属されるが、帯革をピカピカに磨いていた。1期半年違うだけでこんなに違うのかと非常に悲哀を感じた。全体的にはカッコよかった。夏に帰宅した時にご近所から「カッコいいね」と言われた。

両親は立川に面会に来てくれた。休みの日に立川に遊びに出た記憶はない。上官の話を聞いたり勉強していたのだと思う。区隊長は仁平さんで、予備士官学校出身の当時は少尉、気さくな人で各班に来てくれてよく談笑した。区隊は7班8班の二個班で40数名だった。

20年3月25日に東京陸軍少年飛行兵学校を卒業、同日に所沢の東部第560部隊付属所沢陸軍航空整備学校に入隊した。歩いて行ったのか車に乗って行ったか分からない。陸軍上等兵に昇進し5円50銭もらった。旧恩給法では陸軍生徒だった少年飛行兵学校の1年間は年金加算されず、上等兵になった半年間は加算されていた。所沢時代に三か月間で三つの衛兵をした事がある。営門を守る内務衛兵、極度に緊張する弾薬庫衛兵、同僚の遺体を見守る屍衛兵。いずれも選ばれた者だけが任された。とても名誉なことであり三つの衛兵を経験した者はほとんどいないと思う。

20年6月に東部第560部隊の盛岡分遣隊に転属された。東北線で盛岡に移動する時、仙台駅で米軍艦載機による空襲警報があり、一昼夜近く列車の中で乾パンと水だけで過ごした。終戦までの半年間は東部第560部隊に所属していた。

東部第560部隊には第1期の特幹(特別幹部候補生)や召集された初年兵がいた。特幹は19年4月から特別に臨時採用した兵隊で、中学4年卒業又は3年終了だったので我々より一つ年上だった。彼らは兵長だったが予備役であり現役の我々と立場が違うとお互いにつまらない張り合いをした。また初年兵は2等兵で年齢も20歳と4歳も年上だったが、欠礼した時には厳しく注意喚起するなど軍隊生活を象徴するような思い出になっている。

所沢では教育隊の延長で陸軍航空整備学校の勉強を続けた外、実習訓練で蛸壺を掘って対空射撃の訓練もした。20年の4月以降はグラマンなどが所

沢の飛行場辺りに飛来していた。特に盛岡ではそういう軍事訓練が多かった。

(盛岡分遣隊で終戦)

昭和20年8月15日正午に正装で隊庭に集合と命令があった。隊庭で玉音放送を聞いたが何のための玉音放送か理解できなかった。改めて上官から戦争に負けた、玉音放送は天皇陛下の直接のお言葉なんだと聞かされた。泣き合った戦友もいた。よかったという感じはなかった。なんで戦争に負けたんだという気持ちだった。負けるとは全く思っていなかった。大日本帝国陸海軍が負けたんだとは何としても割り切れない気持ちだった。16, 7歳の子供でしたから。純粹そのものでしたから。負けたと聞いて感情がこみ上げたのでしょう。

翌日突然兵長に任用され(終戦兵長)将校集会所の当番長を命じられた。理由はいまでも分からない。当番長となり将校集会所の糧秣等の管理を任せられた。将校集会所は当時の高等官の食堂(将校)で、半任官食堂(下士官)のものとは区別されていた。同期が皆復員していく中で、終戦から8月29日まで2週間やらされ復員が遅れた。

衛生兵が、地方(軍隊の周辺を地方と呼んだ)は物資が少ないので、マーマーキュロとか包帯とかいろいろ役立つものを持って来てくれた。その見返りに携行食、缶詰とか乾パンとかを渡して喜ばれた。将校集会所の糧秣倉庫にはびっくりするほどたくさん食料が残っていた。将校もどんどん復員して最後には一人二人が残っていた。あの時は偉い将校は兵隊より先に復員していたのではないかと思う。最後には将校集会所はガラガラになった。

(8月29日復員)

復員時、衛生用品や糧秣で大きな荷物になった。一人だけで復員する状況だったので、近所の農家の方々が自動三輪車を出してくれて盛岡駅まで送ってくれた。その時の感激、うれしさ、他人の人情は忘れられない。家族が疎開していた大宮駅に着いた。16, 7才の子供が大きな荷物を抱えていると、駅員さんが疎開先の住所を探し出してくれて、リヤカーを引っ張って家まで運んで送ってくれた。ありがたくて嬉しくて。盛岡の農家の方と駅員さんの有難さは今でも忘れられない。

大宮から母親の実家があった川越に行き、いずれ新宿に帰る希望だった。当時、都内への転入制限があって、家族の誰かが官職に就くと優先される話を聞き、昭和21年7月に警察事務官の試験を受けた。もともと軍隊の経験を生かして警察志望だったが、17歳で年齢が達してなく警察官は志願できなかった。以来警視庁で退職するまで務めさせていただいた。